

## コリント人への手紙第一3章5節 「自分の資格」

### 1A キリストによる凱旋の行列

1B 王なる将軍キリスト

2B 行列の捕虜

3B 救いと滅びを決める香り

### 2A 自分自身にない資格

1B ぶどうの木の枝

2B 善のない肉

3B 最も小さい者

4B 神の恵み

### 3A 神からの資格

1B 恵みによる務め

2B キリストの復活のいのち

3B 信仰による確信

4B 主のしもべ

## 本文

コリント人への手紙第二3章を開いてください。私たちは、この3章を二週かけて見ていくことになります。来週の午後の礼拝で、一節ずつ見ていきます。今朝は5節に注目します。「何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません。私たちの資格は神から与えられるものです。」

パウロは、コリントの人たちの一部から、真正な使徒なのかどうか？を疑われている状況に置かれています。偽使徒たちがいて、彼らが、コリントの教会のような、パウロの働きの後にやって来て、パウロの評判を引き降ろすことによって、自分たちが支配しようという悪巧みを持っていました。私たちも、既存の教会がいかに誤っているかを語ることによって、自分のところに引き寄せようとする働きには、警戒しないといけません。未信者の人たちに福音で届こうとするのではなく、既に信じている者たちを集めることを目的にしているからです。

それで、パウロは自分の使徒職を弁明せざるを得ない立場に置かれています。しかし、自分が使徒であることを弁明するのに、あたかも自分自身にその資格があるかのように思われてしまいます。しかし、そうではないとパウロは、はっきりと述べます。自分自身には、主イエスの使徒だという資格はない。自分ではなく、すべてが神から来ているのだということを言っているのが、この箇

所です。コリント人への第二の手紙は、パウロによる非常に個人的な手紙になっているのですが、しかし、彼の福音宣教師としての生き方を弁明している中に、私たちがキリスト者として生きるのに、なくてはならない知恵を教えてください。今朝は、その知恵の一つです。何かを成したと考える資格は、自分自身にはない。その資格は、神から来るものなのだ、ということです。

### 1A キリストによる凱旋の行列

なぜ、パウロが「何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません。」と言っているのか、その背景になっているのが、前回の学びです。彼は、数々の困難を経て、自分の内を見れば、不安と気落ちでいっぱいになっていた。それにも拘らず、主が福音の戸を開き、またコリントの人たちが、誠実に、罪の問題に対処してくれたことに深い慰めを得ています。このことを、キリストによる凱旋の行列として、言い表していました。「2:14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。」

### 1B 王なる将軍キリスト

これは、ローマの将軍が外国の地を征服した後、分捕り物を携えながらローマで凱旋の行列を組む儀式、凱旋式のことを指していることを学びました。ここでローマの将軍は、あたかも王であるかのような装いです。パウロは、ここで、人々を罪の中で苦しめてきた悪の勢力を征服されたキリストが、凱旋の王として来られていることを話していました。キリストが、サタンに打ち勝ち、諸々の悪霊どもを縛り上げて、王として凱旋しておられるということです。

### 2B 行列の捕虜

そして、パウロ自身もまた、自分自身は、まるで捕らえられた身であるかのように、苦しみを受け、自由を失っているような、敗北者に見える姿で形容しているのです。行列の中にいる、捕らえられた者たち、捕虜の一人であるかのようにみなしています。捕虜は、多くの場合、公開処刑にされるのですが、使徒たちは、同じようにキリストの囚人として死ぬかもしれないという位置にいたのです。

しかし、ここで大事なものは、自分は今、こんな惨めな姿なのに、なぜか、キリストの凱旋の行列の中にいるという光栄なのです。自分の肉はこんなに弱くされているのに、キリストの栄光と権威が現れているという事実です。このことが、キリスト者の生き方をの如実に現しています。

### 3B 救いと滅びを決める香り

そして、行列においては、神々に献げる香りが放たれていますが、パウロはそのことをも取り上げて、キリストを知る知識の香りを、自分たちが至るところで放っていると言いました。福音を伝えていることです。そのことによって、すべての人が救いに至るわけではありません。救われる人は救われているのちに至りますが、拒む人は滅びに至ります。自分たちの語る福音によって、このように

人々が二手に大きく分かれていきます。それだけの大きな務めを果たしているのです。

そこでパウロは、16節でこう言うのです。「このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。」ここで、日本語の訳ではうまく出て来ていませんが、今朝の本文と同じギリシア語がつかわれています。つまり、「このような務めの資格を持っている人は、いったいだれでしょうか。」と語っているのです。ふさわしい人、というのが、資格のある人、と言い換えることができます。3章5節は、ここのパウロの問いに対して、自分自身で答えている箇所なのです。

## **2A 自分自身にない資格**

キリスト者として生きるとは、イエスを主として生きること。そして、自分自身がキリストの死とよみがえりに結ばれていることを、その生き方で示す人々と言ってもよいでしょう。自分自身は、キリストの十字架に共につけられており、死んでいるのです。けれども、キリストが、よみがえらえて、この方を信じる信仰によって、生きています。もはや、自分が生きているのではなく、キリストが内におらえて、自分は生きています。

ですから、自分自身については、何も良いものがない、何も神を喜ばすようなものはない、ということを知るところから、キリスト者の生活は始まります。

## **1B ぶどうの木の枝**

イエス様は、ご自身と弟子たちとの関係を、ぶどうの木とその枝の関係で言い表されました。「ヨハ 15:4-5 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」

私たちは、キリストを信じる生活を歩んでいると言っても、どこかで誤った考え方を持ってしまうがちです。それは、自分自身が改善されるということです。自分自身が良くなっていくということです。この考えは、正しいようで、実はとても危険です。なぜなら、キリストなしで、キリストのようになろうとしている試みです。悪魔は、そのような誘惑をエバに行ったのです。自分自身は決して良くなりません。そうではなく、霊的に成長するとは、キリストとの結びつきがさらに強くなって、深まって、それで、自分が自分により頼まなくなることです。自分がいかに、頼りにならないかをして、イエス様に、効果的により頼み、信頼し、イエス様に自分の内で生きていただくことを学ぶこと、知ることが、霊的成長です。

それをイエス様は、私たちは枝であるということと言い表しました。ぶどうの枝がいかに細かいかを

知らないといけません。その細い枝から、豊かなぶどうの実が結ばれるのです。枝には、全く実を結ばせる源はありません。枝は、火で燃やされてしまうような存在です。ぶどうの木、その幹につながっていなければ、何の役にも立たない存在なのです。キリスト者の大きな過ち、またキリスト者に対する悪魔の誘惑は、キリストではなく、枝に何か良い物が出てくると思わせることなのです。所詮、そんなことはできませんから、自分で努力してもうまくいかず、うちのめされます。キリストではなく、自分自身を見つめて、あたかも枝から何かが出てくるかのようにさせるのです。これは、巧妙な悪魔の錯乱なのです。

枝はあくまでも枝なのです。自分はどうしようもない、として、卑下したりする人に対して、私は、他の多くのクリスチャンと違う励まし方を大胆にも致します。「どうしようもない？ どうしようもなくいいじゃん。だから、イエス様が十字架につけられて、そのままの惨めなあなたを受け入れて、愛されたんじゃない。」どうしようもないから、神はご自分の恵みの栄光を、あなたを通して現わすことができるのです。枝には何の価値もないのです。枝は、幹につながっているというところに価値があります。つまり、自分自身ではなく、キリストと結ばれている自分に、キリストの価値が大いにあるのです！

## 2B 善のない肉

私たちは、ローマ人への学びで、いかに自分たちの内に善がないかを見ました。ローマ7章において、パウロが自分の内にある葛藤を言い表しました。「7:22-24 私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいますが、23 私のからだには異なる律法があって、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだにある罪の律法のうちにとりこにしていることが分かるのです。24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」このように、自分のからだに働いている、罪の法則があると嘆いています。それで、8章でパウロは、はっきりと言います。「8:7 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。」従うことができない、とはっきり言っています。肉には善が宿っていないのです。

ですから、私たちは全く異なる原理によって、生きる存在なんですね。自分自身の内には、全く資格がないということです。自分に、主に仕える資格があるのかどうか、それを自分の内に探すのであれば、当然ながら失格なのだということに気づく必要があります。

## 3B 最も小さい者

それで、パウロは、自分が成したことについて、全く自分ではないということを書いていました。「I コリ 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。10ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。

働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」彼は、テモテ第一の手紙では、自分のことを「罪人のかしら」と呼んでいます。自分は、最も小さき者で、それは、神の教会を迫害したからです。自分は他の使徒たちよりも、もっと多く働いたのですが、全く自分がしたことではなく、神の恵みだということです。

#### 4B 神の恵み

私たちが、自分がなかなか良くなれない、と考えること自体が、実は高慢です。それは、良くなる可能性があると考えているからです。聖書は、全く良くなれないことを知っているからこそ、この世にキリストを遣わされ、罪人の私を救ってくださいました。全く良くなれないからこそ、キリストと共に十字架につけられ、死んで葬られたのです。そして、神の恵みによって私たちを救ってくださいました。「エペ 2:8-9 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」神が恵みのゆえに、私たちを救われたのは、私たちが行いを誇るのしないようにするためなのだ、ということです。

ここで大事なのは、「誇る」ということを、単に、威張るとか、自分ができると優越感に浸るという意味ではないということです。自分ができるかどうか、できないという尺度をなくす、という意味です。分かり易く、人間的に言うと、しばしば劣等感、優越感の裏返しだと言いますね。「私はできません」というのは、「私は頑張れば、いつかできます。」という意味ですから。できないと言っているのは、まだ自分ができるかできないかの尺度で生きているのであり、自分の行いを誇っていることに他なりません。そのような行いの生活に対して死んでいるのだ、ということのみなすのです。

#### 3A 神からの資格

では、私たちの働きは、どのように見ていくのか？パウロは、「**私たちの資格は神から与えられるものです。**」と言いました。

#### 1B 恵みによる務め

パウロは、テモテに対して、このように自分が使徒となったことを、話しています。「I テモ 1:12 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。」この箇所を読むと、あたかも、パウロが主に忠実であり、その忠実さを認めてくださったように読めます。そうではありません、ここでの「認める」は、「みなしてくださる」というものであり、彼が何の働きもしていないのに、忠実な者とみなされるのです。忠実になったから、忠実な者と認められたのではなく、まだ忠実かどうかわからない、働きをしていないのに、忠実な者と認めてくださり、使徒の務めに任命してくださったのです。

ここが、神の働きのすごいことなのです。イエス様は、十二弟子を選ばれた時に、イスカリオテの

ユダを除いて、そのように初めから、忠実な者と認めてくださいました。これを「恵み」と言います。ここは、とても大事ですよ。多くの人は、クリスチャンであっても、自分が多くのことを成し遂げたから、それで忠実な者となり、報いが与えられると誤ってしまいます。そうではありません、神が私たちを召し、任じる時は、神は初めから終わりまですべてを知っておられる方であり、恵みによって選び、任じてくださるのです。

これは、使徒たちの話ではないのです。すべてのキリスト者が、キリスト者として生きるように召されたのであれば、すべての人が恵みで選ばれているのです。自分が自分で思っている、いわゆる自意識というのは、神の恵みの世界では、本当にあてになりません。自分で自分を思っているのは、自分が屑ぐらいに考えておけばいいです。それ以上、落ちることはありませんから。そんなことを考えるのではなく、ただ、主に命じられたことを行うことに集中するのです。その命令は、重荷になりません。自分は知らないところで、主は自分を大いに用いられます。前回学んだように、自分が負い目に感じているところで、その弱さを覚えているところで、むしろ、主により頼んでいるので、主が大いに用いているのです。

## 2B キリストの復活のいのち

自分の内に良いものがないことを私たちは知っています。いや、死んでいることを知っています。そして神は不思議にも、恵みによって、死んでいるとみなしている私たちに、キリストの復活のいのちの原則を働かせるのです。自分がまだ何とかしようとする時には、肉の原理が働いてしまい、罪の原理も生きてしまうのです。しかし、自分に死んでいるとしている時に、自分ではなく、よみがえられたキリストにより頼んでいるので、自分ではなく、主がしてくさるのです。

## 3B 信仰による確信

そこで必要なのは何でしょうか？信仰です。神は、してくさるという信仰です。二人の人物のことを思い出します。一人は、ユダの王ヒゼキヤです。彼は、まさに自分の肉がそがれる戦いがありました。アッシリアが、どんどんユダの町を攻め入っていきます。自分がまさに、ライオンの口に入った羊のような思いだったでしょう。そして、密かにエジプトに使者を送ります。それが、アッシリアに知られます。そこで、エルサレムをアッシリア軍が包囲して、ラブシャケが、ヒゼキヤの一貫性のなさを指摘するのです。

ヒゼキヤは、赤ん坊が産道を通っているのに、産み出す力がないとまで言いました。預言者イザヤは、アッシリアの王は引き下がることを預言しました。ところが、アッシリアの王センナケリブは、手紙を出し、さらにヒゼキヤに追い打ちをかけるような内容を話します。ヒゼキヤは、打ちひしがれて、その手紙を開いて、宮の中に行きます。主にその手紙を読んでもらうためです。そして、祈るのです。主は救ってくださることを信じて。すると、その夜、主の使いが十五万のアッシリア軍を打倒しました。自分が全く無力になりましたが、しかし、神は全能なるお方だとして、この方に願い求

め、この方を仰ぎ見たのです。

もう一人思い出すのは、若き頃のダビデです。ダビデは、ゴリヤテと戦った時です。彼は、そこで、自分とゴリヤテを比較しませんでした。彼の目は、一心に、主の御名をののしったゴリヤテでありました。主の御名を罵ったのであるから、主が戦われるのだと確信しました。彼はゴリヤテにこう言っています。「Ⅰサム 17:45-47 おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしったイスラエルの戦陣の神、万軍の【主】の御名によって、おまえに立ち向かう。46 今日、【主】はおまえを私の手に渡される。私はおまえを殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。47 ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、【主】が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは【主】の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される。」主が戦ってくださるのだから、主の御名によって立ち向かったのです。

私たちの戦いは、信じる戦いです。信じる人が起こされない時に、それでもここに神がおられると信じること。癒されない体がある時は、それでも神がこの体を癒やされると信じること。自分の目に見えるところに、目に見えない神をお迎えするのです。

#### 4B 主のしもべ

私たちが集中すべきは、主が言われたことを聞いていくことです。主のしもべに徹することです。自分が資格があるかどうかなど、気にする必要はありません。いや、自分には全く資格がないと気づくべきです。しかし、資格があるのです！矛盾していますね、資格がないと気づくべきといいながら、資格がある！と言います。ここが大事で、神の恵みによって、神によって資格が来ています。ですから、全く自分には資格がないということと、資格があることは矛盾していないのです。神が、資格がない者を選ばれ、資格ある者として立たせられるのです。私たちに必要なのは、信仰による勇気ある一歩なのです。